創生

夢を持って挑めば、必ず実現する

成功より成長
～すべての活動は会員の利益の為に～

雄飛

第31号　2005. 8月

発行人：鳥取県西部中小企業青年中央会　会　長　武海　章　編集責任者　水　康徳　印刷所　東京印刷㈱

ごあいさつ

第31期会長
武海　章

鳥取県西部中小企業青年中央会、第31期会長を務めさせていただきます、武海 章でございます。どうぞ宜しくお願い致します。

昨年度、当会は創立30周年を迎え、記念事業も大成功のうちに無事終えることが出来ました。改めまして関係各位の方々に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

そして迎えました今年、平成17年度は30年という長い歴史に支えられ、確かな伝統を築いてきた当会が真の意味での自立を果たし、更なる高みへと駆け上がっていく足懸かりの一年となります。その土台を創り上げられた諸先輩方の御努力に敬意を表すると共に、会員の皆様には新たな青年中央会を共に「創生」していく事を提案致します。

また、現在の激動の時代を乗り切り、中小企業が発展していくためには個々人の努力は当然の事ながら、組織の強化や情報の共有化などを図り、既存の枠組みにとらわれない連携での積極的な取り組みが必要だと考えます。中小企業の果たす役割はこれまで以上に重要であり、我が鳥取県西部中小企業青年中央会はその中心的存在として活動していかなければならないと思います。会員相互の新たな連携の中でビジネスチャンスの創出を目指し、また産官学をはじめとする関係各機関との協力体制も緊密化させたいと考えております。

実現させたい事は沢山ありますが、今一度「夢をみる」事の大切さを謳って参りたいと思います。「夢をみる」のは、青年の特権であります。そして同じみるなら大きな夢をみていきたいと私は考えています。加えて青年らしく失敗を恐れず、臆する事無く、大いに意欲を持ってチャレンジする会員を支援・育成していきたいと思います。「夢を持って挑めば、必ず実現する」のです。

当会のすべての活動が会員の利益になるべく、今年一年間、よりいっそうの活動の強化・充実に努めて参る所存ですので、会員の皆様の積極的な参加と理解・協力を、そして今日の青年中央会を築いてこられた諸先輩の方々には変わらぬ御支援をお願い致しまして、私の挨拶とさせて頂きます。

副会長抱負

みらいづくり・ビジネス交流・ビジョン検討委員会担当

福田一哉

西部青年中央会も発足して30年を過ぎ、いよいよ成長期から成熟期に入ったのではないかと考えます。

成熟期といっても、会員は25から45才までの、働き盛り、考え盛りの活きのいい方ばかりですから、おとなしく熟すという意味ではなく、今迄先輩方が築いてこられた立派な基礎に、そろそろ何がしかの建物を建てる時が来ているのではないかという意味です。従って、30期を越えた青年中央会は、今迄の形にとらわれることなく、自らを律しつつも、思い切って大きく変わっていくべきだと思います。大きく変わるということは、様変わりするということではなく、大きく進化するのだということを忘れずに、先輩達がつくられた基礎に、しっかりした建物を建てる準備を始めなければなりません。そのような大切な時に、2期連続で副会長をさせていただくことは、大変幸せであり、また、今一度気を引き締めていかなければと、未熟な頭で考えております。

「わしらちゃ、野武士軍団だけん、やらないけんと思ったことは、何でもしてみやい。だーも、何でも一生懸命せよ。そおから、ケツはちゃんと拭けよ。」と、先輩から教えていただいたことばを胸に、今年一年、武海会長をはじめ会員の皆さんとともに、一丸となって頑張りたいと思います。どうぞ、よろしくお願いします。

メディアコミュニケーション・政治行政委員会担当

水　康徳

30周年を契機に我々青年中央会も新しい時代に合った組織に移行する端境期を迎えております。そのような時期に副会長という大役を拝命し、通常総会、県総会を終えた今、その責任の重さを感じております。多くの諸先輩方が築いて来られた当会の歴史を正しく認識し、その上で今後当会が向かうべき方向を具体化して行く事が、今、必要ではないかと考えております。当会が時代に即した組織のなるよう微力ではありますが努力して参ります。また副会長として、当会でも創成期の頃から活動を続けてきた歴史ある政治行政委員会と昨年度ホームページをリニューアルし、活動のフィールドを拡げているメディアコミュニケーション委員会を担当させて頂きます。今年度のテーマに則り、両委員会がそれぞれの夢を実現出来るよう、担当副会長としての職務を遂行して参ります。会員の皆様、一年間、よろしくお願いします。

司法問題研究・総務委員会担当

桶村清子

今年度、副会長という大役を拝命し、日に日にお受けした未のほど知らずさを痛感いたしております。しかし、お受けしたからには今年度のテーマである『成功より成長』~すべての活動は会員の利益の為に~ を実践すべく、微力ながら会の運営の一助となるよう邁進いたす所存です。

『創生』～夢をもって挑めば、必ず実現する～のスローガンのもと、総務委員会と司法問題研究委員会を担当いたしますが、総務委員会は伝統のある委員会であり、司法問題研究委員会は今年度創設された新しい委員会です。新設委員会は生みの苦しみと未知なる活動へのときめきがあり、総務委員会は伝統委員会であるからこそ新しく創生することの楽しみがあると思います。各委員長とも思いも実力もある委員長ですが、力を充分発揮できるようサポートしたいと思います。

「天行は健なり 君子は自ら彊めて息まず」の精神で、私を含め会員個人の成長ができるよう努める覚悟です。一年間よろしくお願いいたします。

第31期新委員長抱負

メディアコミュニケーション委員会

河津慎二

西部青年中央会広報委員会は30期から印刷発行物だけではなく、ホームページのメディアにも携わることになりメディアコミュニケーション委員会として大きく変わりました。それにプラスして今期（31期）は、中海テレビによる中央会番組制作も行い、印刷物の発行、ホームページの活用推進・運営管理の3本柱を、西部青年中央会の新しい広報活動として確立する目的で委員会活動を行います。この3本柱が確立できれば内向き、外向き両方の情報発信・収集が出来、いろいろな面で西部青年中央会の活性、地域貢献に役立たせることができると考えます。でもこのような活動は、ひとつの委員会で出来るものではありません。委員会メンバーといっしょに考え、学び、挑戦して頑張っていこうと思いますので、皆様のご指導、ご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

みらいづくり委員会

門脇幸一

「みらいづくり」を、西部青年中央会会員の「ひと」の未来、鳥取県西部を圏域とした（中海圏域を構成する地域としても）「まち」の未来、そしてこの地域をふくめ、環境問題を考えた「地球」の未来を、「愛する気持ち」で考えていこうと、委員会テーマを「ひと・まち・地球への愛」としました。

自分のふるさとや住んでいるまちが好きであれば、それを他の人から誉められるのは誰でも嬉しいものだと思います。誉められればまたよりよくしよう、美しいものを守って次代へ引き継いでいこうと思うものです。だからまず、この地域の好きな所をどんどん見つけていこう（こんなにいいとこあるよってのを教えてください。）と考えています。

皆様のご協力をいただきながら頑張っていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

政治行政委員会

村岡誠一

政治行政委員会は、西部青年中央会における伝統を持った委員会です。過去において、医大移転、広域合併、観光推進等、数々の問題に調査・提言を以って、行政に何らかの影響を与え続けてきました。第31期においてのテーマとして、異業種団体の中央会ならではの新しい取り組み「創りだしていく事」に挑戦したいと考えています。時代は行政改革による、規制緩和・民間開放へ既に動き始めています。「官」から「民」へのパブリックビジネスチャンスは広がっています。「指定管理者制度」「特区」を研究し、委員会活動では、実行可能な部分までこの1年間進んで行きます。委員会メンバーとは、「同じ釜の飯を食べる」よき友人として、日々勉強し、酒を共にし、一緒に成長していきたいと思います。

ビジネス交流委員会

板垣慶太

今年度「ビジネス交流委員会」委員長を拝命いたしました。当委員会は武海会長より示されております「次代の中小企業を担う我々がビジネスチャンスを通じて交流を深め、その上で企業人としての自分を見つめなおす」という委員会行動指針を基に、異業種集団である当会の会員がビジネスを共通の話題として相互の交流を深め、鳥取県西部の中小企業の発展に寄与できる活動を目指したいと思います。

ビジネス、仕事を通じての交流といいましても様々です。OB会員、親会、他地区の青年経済団体、外部専門家等々、より多くの人々と交流を深める機会を提供していきたいと思います。担当例会は10月、OB会員とのビジネス交流例会を予定しております。

一年間、学び、遊びそして充実した委員会活動となるように全力を尽くしますので、会員の皆様にご指導・ご協力を宜しくお願いいたします。

司法問題研究委員会

堀江則夫

来るべき『裁判員制度』、恐らくは避けて通れない司法制度改革となるでしょう。そこで皆さん想像してみて下さい。ある日家に帰ると、裁判所から何の前触れなく「呼出状」なるものが郵送で送られてきました。いついつ来いとのことが書いてあります。行ってみますと、何やら「この人を知ってるか?」「あの人はどうか?」と訳の判らない質問をされ、挙げ句、心理テストのようなものまで受けさせられました。「では後程ご連絡いたしますので、本日はお帰りください。」と言われ、帰って数週間後「○月○日、初公判へ裁判員として出廷してください。」・・・えっ?・・・さあ、どうしましょう?!

ご心配には及びません。そこを私たち司法問題研究委員会が研究します。『裁判員制度』とは何たるか、徹底的に『解明』し、溢れんばかりの英知（?）で『考察』を加え、そして皆様へ『啓発』して参りたいと考えております。どうか一年間宜しくお願いいたします。

総務委員会

中田耕治

今年度、総務委員長を仰せ付かり、期待と不安が入り混じり色々考えることが多いこの頃です。私自身中央会での入会年数が浅く、活動への認識不足も否めません。委員配属も新入会員の方が多いので、共に1年間、総務として出来る事を考えて行ければ良いと思い、委員会テーマを「自ら清新溌剌的活動を考察、実践する」としました。言葉のごとく、新しく元気のよい活動が出来る委員会を目指したいと思います。総務委員会は庶務処理を行う場面があれば、会員交流事業もあります。いずれも企画・立案・実施しますが、いずれも一人の力で作ることではありません。委員会内外で相談しながら、迷いながら実践し、結果どうだったかを考え、反省する、その経験と反省が自信につながります。皆で考え経験の中での自信づくりを行い、中央会に入って「よかった」と思える、つながりを育めたらと考えますので、どうかご支援ご指導の程、宜しくお願いします。

ビジョン検討委員会

花園直樹

我が西部中小企業青年中央会には30年間という誇るべき歴史が有ります。その間、諸先輩方の御尽力により、今や我々は自他共に認める完成された組織に成長したと言っても過言ではありません。しかし完成された(成熟しきった)組織は往々にしてマンネリ化による「衰退」という危険性をも同時に孕んでいるという事も忘れてはならないと思います。

我がビジョン検討委員会では中央会の将来像を模索して行きます。より活発で魅力のある組織像を委員会の皆さんと検証して行きたいと考えます。もちろん先輩方の実績を否定するものではありません。それらを尊び、拠り所としながら、我々独自の未来を模索すべき時期に来ていると思います。

第31期を新しいスタートの年と捉え、「当り前を変えて行きたい。」という心構えで委員会運営に取り組んでいく所存です。皆様、御協力の程何卒宜しくお願い申し上げます。

通常総会・卒会式・懇親会開催

第31回 平成17年度通常総会

第31回平成17年度通常総会が米子全日空ホテルで平成17年7月14日（木）午後6時３０分より行われた。

中本会長から『１年間を振返り月日の経つのは大変早かった。駄馬に鞭打って青年中央会の活動に邁進した。役員のみならず124名それぞれ会員が、主人公である活力のある青年中央会であるべきであり、今後も努力していく。』との挨拶があった。

決議事項に移り福田一哉副会長の議事進行の下、第１号議案「平成16年度事業報告並びに収支決算書承認の件」、第２号議案「平成17年度事業計画並びに収支予算書（案）承認の件」が満場一致で可決された。

つづいて長年の中央会活動における功績を称えて、第29期会長浜田一哉直前会長、平成15年度県会長市位清明直前県会長に特別功労賞と感謝状の授与が行われた。受賞された後、浜田直前会長は「この日、この時間が来るべくして来たと実感しています。13年半という長い間お世話になりました。これからも仲良くして下さい。」と、又、市位直前県会長は「中央会で最後のあいさつになると思います。癖のある同期のみんなが、後輩の皆さんにご迷惑をおかけした事を、私が代表してお詫び致します。現役の時と変わらぬお付き合いをお願いします。」と冗談を交えながらも、感謝と惜別の言葉を述べられ締めくくられた。中央会の一時代を築いてこられた偉大な先輩方の雄姿に胸も目頭も熱くなった。

皆勤者（16名）・精勤者（28名）へ会員表彰が行われた後、中本会長より『正直、非常に迷いました』と率直な感想の後、平成16年度最優秀委員会並びに優秀委員会が発表された。

最優秀委員会は渡辺一徳委員長の人づくり委員会、優秀委員会は内田康彦委員長のエコチャレンジ2004委員会、平新武志委員長のメディア･コミュニケーション委員会。本年度は特別に「去・来・現」賞として高橋隆一委員長の会員拡大特別委員会が発表された。各表彰委員会の会員が壇上に上がると盛大な拍手が送られ無事に総会は閉会となった。

私は通常総会に出席するのは初めてだったが、各表彰委員会会員の歓喜の笑顔が印象的であった。そして、平成17年度の新たな委員会の活動がスタートしたと実感した。

（記事：牧田、有和）

最優秀委員会
「人づくり委員会」

会員表彰

優秀委員会
「エコチャレンジ 2004 委員会」

優秀委員会
「メディア･コミュニケーション委員会」

「去・来・現」賞
「会員拡大特別委員会」

卒会式

通常総会終了後、引き続き平成17年度第30期卒会式が行われた。卒会者10名の名前が読み上げられ、中本会長が「人間が青年という名の下行動できるのも限られた時間。我々も現役会員として青年中央会活動を一生懸命やる、ということをお誓い申し上げておめでとうの言葉にさせていただきます。」と中本会長が送辞を述べられた。卒会者を代表して徳中志伸会員から『楓葉霜を経て紅』という中国の故事が紹介され「自分は中央会活動18年間で先輩方にいろいろな事を教えてもらい、楓の葉っぱに例えるなら黄色くなることができた。これからはＯＢ会員にはなるが、みなさんと共に一緒になって葉を紅くできるようにがんばっていきたい。」と中央会へのエールを述べられ、現役会員からなごり惜しむ声とともに盛大な拍手が送られた。

懇親会までの短い時間を使って、卒会者のみなさんの記念写真の撮影も行われ、一人一人に贈られた花束を手に、思い思いのポーズをとられていた。カメラに向かって少し照れくさそうな中にもすてきな笑顔がみられたのは、やはり心の中にこれまで青年中央会の活動をやり遂げた、という達成感にも似た気持ちがあったのかもしれない。

卒会を迎えられたみなさん、本当にありがとうございました。

（記事：松本）

懇親会

通常総会・卒会式の終了後、会場を移り懇親会が開会された。懐かしい顔ぶれのOBの方々に続き来賓の方々が入場。中田耕治新総務委員長の司会で、まず第31期武海章会長が今年度のテーマ「創生」について説明され、一年間の抱負と決意を語られた。続いて野坂康夫米子市長、足立統一郎境港商工会議所会頭、中村昌哲OB会会長とご来賓に挨拶を頂き、寺嶋綱一商工中金米子支店長の乾杯でスタートした。歓談の中、新役員がスクリーンで紹介され、新OB会員の紹介に移った。お一人ずつ「中央会の思い」を一文字に表現し、今までの自分の中央会活動を通しながら、何かを後輩に伝えようと語られる姿が印象的だった。最後にＯＢ会員お一人ずつの文字がすべてつながり短歌『夏の夢に　和みの会話　人の縁　楽しき時を　共に喜ぶ』となり大きな拍手が沸いた。その一文字ずつを繋ぎ作られた短歌は、卒会者の先輩方の気持ちをまとめて代弁したかのようなすばらしい出来だった。10人の卒会される先輩方、「どうもありがとっ！(美空ひばり風)」。そして懇親会が盛り上がる中、竹本智海境港市助役が締めをされ、無事懇親会は閉会した。

（記事：牧田）

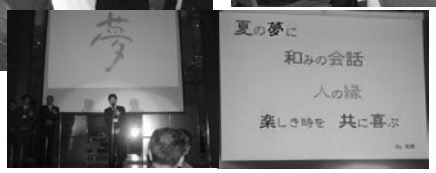
野坂康夫米子市長

足立統一郎境港商工会議所会頭

中村昌哲ＯＢ会会長

寺島綱一商工中金米子支店長の乾杯風景

竹本智海境港市助役



トライアスロン壮行会

懇親会の中で恒例のトライアスロン壮行会が行われた。今年度第25回全日本トライアスロン皆生大会に青年中央会からＯＢ含め4名出場することになった。その中で中華料理大和の宮崎大介会員といこい亭菊萬の柴野清ＯＢ会員が壮行会に出席された。

皆生トライアスロンといえば全国的にも有名であり、われわれ地元民にとっても輝かしく、とても誇らしい事であると思います。中央会入会間もないわたしにとっては、中央会、ＯＢの中から4名も出場することには大変驚きましたが、壇上に登られるお二人の姿を見て、やはり日頃から鍛えておられる様子が伺え、本業の傍ら時間をつくりトレーニングをいつされているかと感心しました。拍手の中、迎えられたお二人は大勢の方から激励を受ける恥ずかしさもあったでしょうか、緊張した面持ちで壇上に上がられましたが、照れ笑いの中にも自信が満ちておられるように感じました。壇上では今年の壮行会で、勇退の決意を表明した中島太郎応援団長と新生応援団の面々による「フレーフレー！！」の声援と共に、会場全体も応援ムードも最高潮に達しました。まるで学生時代の体育祭を思わせるような応援でした。最後に選手の宮崎会員と柴野ＯＢ会員の挨拶があり、お二人とも完走を第一目標にしておられました。こうして壮行会は無事終了した。出席者の皆様は、お疲れ様でした。

（記事：高井）

第25回　全日本トライアスロン皆生大会

平成17年7月17日（日）、第25回全日本トライアスロン皆生大会が行われた。午前中は小雨混じりの怪しい雲行きであったが、選手およびスタッフの想いに天気も次第に応えてくれ、25年目の節目にふさわしい1日となった。

スイムのスタート地点では、早朝にも拘らず中央会応援団のエールがこだまし、早くもヒートアップ。大きな声援と独特な緊張感の中、開会宣言とともに幕が切って落とされた。

本大会には参加選手773人に加え、市民ボランティア約3,000人と数多くの人が携わっており、選手と一緒に喜び合いたくて毎年参加する市民ボランティアも多いと聞く。地元、選手そしてボランティアが一体化して作り上げるこの大会の意義はとても大きい。
大会中の選手の「楽しんでいる」姿は印象的であった。またスポーツマン（ウーマン）らしい清々しさは傍目でみていても大変気持ちよいものであった。スイム・バイクと長丁場をこなした後のランにもかかわらず、声援には笑顔で答え、「ありがとう」の声までもらった。何気ない1コマではあるが、選手を心の底からサポートして力を与え、何より選手から大きな勇気と感動をもらえるという事が本大会の魅力である。

大会中は特段の大きな事故もなく、無事大会が終了できたことも喜ばしいことである。早くから実行委員会スタッフをはじめとして、マラソン部・ボランティア部そしてAS部の一人ひとりが責任をもって行動した賜物であり、本大会を支え・盛り上げることが出来た。
我々会員も「もう1人のアスリート」として無事ゴールを迎えることが出来、熱気と興奮に満ちた本大会も幕を閉じた。

（記事：小幡）

トライアスロン大会を終えて

マラソン部 部長　田中康裕

マラソン部の皆様、大変お疲れさまでした。そしてボランティア部、AS部及び会員の方々にも備品洗いや当日の倉庫整理作業等、様々なご協力を頂き大変感謝しております。今大会は各部の連携が例年以上にあり、各部が一丸となって中央会全体として大会に臨めたことが大きな収穫であったと感じています。

マラソン部は桜の咲く頃から活動が始まり、大会当日に向けて徐々に作業量がヒートアップし、当日の撤収作業ですべてのエネルギーを使い果たす感があります。従って恒例となった終了後のビール掛けも、達成感を感じながら格別な感動があります。また今年は25回の記念大会ということもあり、開会式ではビッグシップのひな壇にまで登壇させて頂き、貴重な体験をさせて頂きました。このような感動の場を頂いたことに感謝するとともに、それまでに散々な無理難題な業務を、快く?引き受けて頂いたマラソン部員のメンバーにこの場を借りてお礼申し上げます。来年もがんばりましょう！

トライアスロン実行委員長　浜田一哉

平成17年7月17日午前7時、過去最高となる773名の鉄人たちが皆生海岸をスタートしました。今回で25回を迎えた本州唯一のフルトライアスロン。唯一となってしまった理由は、大会運営の際に生じる多くの難問を解決することが不可能だからです。資金調達、大勢のボランティアの確保、多様化する交通事情の中、190.195kmという長いコースの安全確保等々の諸問題をクリアしなくてはなりません。官民相互の理解と協力なしでは、到底叶うことはできない競技なのです。

今回、青年中央会会員はOBを含めて4名が選手として出場し、見事全員が完走いたしました。一人一人の大会に臨む目標は違えども、その勇姿は私たちに深い感動を与えてくれました。また、ASにおいて、小中高校生たちが元気よくボランティアしてくれたことが印象的でした。

最後になりましたが、大会を支えてくれた役員、ボランティアの皆さん、駆けつけていただきました東部・中部の皆さんに深く感謝いたします。有難う御座いました。

ボランティア部 部長　畠山広幸

「…私は畏れる。打ちのめされる。走り去っていくその汗の数にも、そして精神の気高さと強さにも。」6年前、入会早々1ヶ月で投げ込まれたトライアスロン。これは本紙に掲載していただいた、選手に対するそのときの感想文です。以来ボランティア部員として今年7大会目。いま少しずつ分かり始めたこと。選手は気高く心強き超人でも孤高の鉄人でもなく普通の人だということ。皆生トライアスロンは、競技スポーツを超えた別次元の価値観、数知れない多くの普通の人の「熱」に支えられて継続しているということ。私たち中央会が、その「熱」の核にあること。

ボランティア部長をさせていただき、いろいろなわがままやムリを申しあげ、顰蹙をかうこともありました。しかしその分成長できたのかなと思います。ボランティア部の皆さんにはご苦労をかけました。そして会員の皆さん、本当にお疲れさまでした！心から感謝申しあげます。ありがとうございました。バンザーイ！

AS部 部長　福田一哉

まずはじめに、紙面をお借りしまして青年中央会の皆さんをはじめ、タニシAS運営にご協力いただきましたすべての皆様に、心から感謝し、お礼を申し上げます。また各部で頑張った青年中央会の仲間、お疲れ様でした。私も初めてのエイドステーション活動だったので、不安な気持ちでスタートしましたが、3人の副部長に手取り足取り支えていただいて、思いっきりトライアスロンを楽しませていただきました。体の芯まで「疲れた～」という実感ですが、疲れの質は心地よいものです。

青年中央会に入会してから今迄ずっと、マラソン部の現場からトライアスロンに接してきましたが、AS部に入れていただいて、より選手に近いところでトライアスロンに接することができ、感動の連続で、時には目頭が熱くなるような場面もあり、マラソン部とはまた違った感動を味わえ、「はまってしまった」というのが本音です。

ともあれ、タニシエイドステーションは大変ではありましたが、全員のチームワークで、ボランティアも選手もともに満足でき、本当に楽しめるエイドになったと自負しております。
今後も、先輩から受け継いだスピリッツを十分に発揮し、みんなに喜んでいただけるエイドをつくっていけたらと思います。
今年購入し、大活躍した太鼓も、中央会エイドの伝統になっていくことでしょう。

トライアスロン選手の感想

トライアスロンの感想
宮崎大介会員

実は私、この中央会に入会してから今まで一度もトライアスロンのボランティアに参加したことがありません。皆さんご存知の通り、トライアスロンはこの中央会にとって最大のイベントであり、それだけ多くの手間と時間が費やされます。そういった中で毎年選手として参加させてもらい、どうやったら貢献できるだろうかといつも考えています。

今年はたまたま運良く好成績が残りましたが、私にとって成績は二の次だと思ってます。ボランティアで貢献出来ない分、選手として精一杯練習して精一杯力を出し尽くす事が自分の仕事だと考えます。そして、皆で熱く盛り上がり、大きな感動を味わう事が出来たら最高の結果だと思ってます。

今年も多くの方々に支えられ、無事それを達成できたと思います。本当にありがとうございました。

第25回全日本トライアスロン皆生大会に出場して
松岡正高ＯＢ（平成8年度卒会）

最初に、今回は完走できるかどうか不安になり、激励会を欠席いたしました事をお詫びいたします。

また一年、連続完走記録を延ばし、はや11年目になりました。この間いろいろな事がありましたが、こうして出場できたのも周囲の人々の応援、援助のおかげだと思っています。

完走できる体を与えてくれた両親に感謝。練習時間を作ってくれた家族、会社の人々に感謝。一緒に練習し励ましてくれたトライアスロンの仲間たちに感謝。最後に、皆生大会に出場の場を与えてくれた西部青年中央会の皆様に感謝。

長い間、応援ありがとうございました。

25回大会を終えて
柴野　清ＯＢ（平成11年度卒会）

西部青年中央会の卒業記念という思いから第20回大会への選手としての出場を最後に、22回大会から昨年までは式典部長として大会にかかわってまいりました。長年の不摂生と年齢の事を考えて今大会への参加は当初考えておりませんでしたが、25回という記念大会でもあり一念発起、選手として出場してみようと決意しました。医者医者からは「体重を落としなさい」と言われながら努力を重ね、何とか出場する事が出来ました。

大会当日の水泳スタート前は現役会員のみなさんにすばらしい励ましのエールを送っていただきました。スタート1分前には水平線を眺めながら、またこのスタートに戻ってこれたことに感動を覚えました。

結果については見てのとおり、完走がやっとでしたが、マラソンの各エードステーションで足をマッサージしてもらいながら栄光のゴールをつかめました。（中央会のエードステーションでも大変お世話になりありがとうございました）

レースを振り返ると、皆生のボランティアの皆さんの温かさは日本一であること、宮崎会員のすばらしい活躍、そして中央会の現役会員とＯＢ会員の熱心な取り組みで大会の運営がなされ、大会を盛り上げていただいていることに感謝いたします。

ご声援ありがとうございました。

ボランティアに参加して

マラソン部　川村　健（平成16年度9月入会）

今回始めて全日本トライアスロン皆生大会のマラソン部ボランティアに参加しました。本番に向け計５回の準備作業に出ました。５回目の作業の時は正直な気持ち「自分一人いなくても準備はできるだろう」と心、貧素な状態でした。迎えた本番の朝、周りの会員みんなも心身共に疲れ切ってる様子の中、一人の先輩会員が「寝てないへんかだいじょぶか？」と声を掛けてくれました。考えてみれば明らかに先輩の方が・・。その後、気持ちに喝が入ったのは言うまでもありません。選手応援、AS と終わってみれば声がガラガラ。体もくたくたになったのに、心地いい満足感と達成感に満たされました。

今回のボランティア参加で一番大切なのは持てる力を 100% 何事にも発揮する事が大事だという事に改めて気付きました。

来年はもっと楽しんでボランティアに参加していこうと思います。 ありがとう！皆生トライアスロン。

ボランティア部　川端今日子（平成17年2月入会）

実は何を隠そう生でみるのもボランティアとして参加するのも初体験！それに何と受け持った場所がゴールとくればずるいですよね。すっかりトライアスロンの魅力に取り付かれてしまったようです。でも部長をはじめボランティア部の皆様のパワーは本当にすごいです。毎夜毎夜の準備作業、毎日山のように届くメーリングリスト。ほんとにお疲れ様でした。この期間を通じ、熱い暑い時間とたくさんのパワーを戴きました。ありがとうございました。

AS部　佐々木雅彦（平成16年10月入会）

この度、初めて全日本トライアスロン皆生大会に AS 部の一員として参加させて頂きました。

ボランティア活動という事を今までほとんどした事がなく、本音を言えばこれまで避けていたように思います。

実際に参加して、自分なりに懸命に応援、お手伝いをした中で、今まで経験をしてない事を学び、苦しいレースの最中にもかかわらず何人もの鉄人達に「ありがとう」という言葉で感謝された事は、何か自分の人生観が変わった気がします。

～トライアスロンそれぞれの想い～

写真集

平成17年度鳥取県中小企業青年中央会　通常総会・親睦会報告

平成17年度（第31回）県総会が、平成17年7月30日（土）、鳥取市今町にあるホテルニューオータニ鳥取にて、15時より開催された。月末の多忙な時にもかかわらず、西部からは会員数114名のうち、本人出席39名（委任状出席42名）があり、東部からは会員数90名のうち、本人出席38名（委任状出席16名）、中部からは会員数37名のうち、本人出席14名（委任状出席14名）、合計91名の参加者によって順次執り行われた。

綱領唱和の後、第30期平野裕章県会長より、1年間の会員の協力に感謝されると共に、来期の新県会長を盛り立てて欲しい、との主旨の挨拶があり、出席者数の報告の後、議事に移った。議長は通例により第30期平野県会長が務められ、第1号議案より第3号議案までスムースに進行した。続いて、承認を受けた新役員が紹介され、代表して第31期家高謙児新県会長が決意と協力の挨拶を述べられた。

第31期家高謙児新県会長

第30期平野裕章県会長

石破茂衆議院議員

記念講演では、地元鳥取県選出の衆議院議員である石破茂氏をお迎えし、「地方経済の飛躍を期して」という演題でご講演いただいた。その中で石破氏は、ご自分の銀行員当時の失敗談や成功例、経験談などから話を進められ、中小企業の我々に求められているのはいったい何なのか、を分かりやすくお話頂いた。印象に残った言葉は「中小企業の経営者たるもの、24時間、365日が仕事だ。」であった。隙のある自分にとって今後の指針にしたいと思う。

会場を移り、親睦会が行われた。記念講演に続いて石破氏にも参加頂き、その他多勢の来賓をお迎えしスタートした。最初に県会長の鍵引渡式があり、平野丸から家高丸への引継ぎが行われた。家高謙児新県会長の初心表明の後、岡本安量東部会長、加藤一巳中部会長、中本高夫西部会長へ盾が贈呈され、来賓の祝辞に移った。各来賓の紹介があり、祝電・お祝い品の披露の後、乾杯へと移っていった。懇親会の途中には、各地区対抗の早食い競争があり、我らが武海章会長を筆頭に西部理事、計5名が挑み、見事散っていった。

市位清明県直前会長におかれては現役として最後の会合となった。本当にお疲れ様でした。何はともあれ、30周年記念事業を控えた鳥取県中小企業青年中央会はスタートを切った。皆で協力しながら新県会長を支え、大成功の1年にしていきたい。

（記事：牧田）

8月役員会報告

8月定例役員会が平成17年8月1日（月）、米子食品会館にて開催されました。当日の主な議題は以下の通りです。

・8月例会の件
・9月例会の件
・その他

※なお、詳細については委員長までご参照ください。

8月例会案内

と　き：平成17年8月20日（土）
　　18:30～食事 19:00～開会
ところ：夢みなとタワー 3F シアター
講　師：西京銀行頭取 大橋 光博 氏
演　題：仮題「我、志の道を行く」

編 集 後 記

総会、皆生トライアスロンも終わり、いよいよ31期メディアコミュニケーション委員会初の機関誌発行となりました。委員会メンバーの中には広報系に携わるのが初めてという会員も多く、読みづらい文章やピンボケの写真があるかもしれませんが、今期は委員会メンバーに記者になってもらい原稿のあとに名前を入れます。我々は広報系のプロ集団ではないので、きちんとした新聞のような原稿ができないかもしれませんが、各個人が一生懸命書いた原稿であり、個性であり、それが異業種で集まってつくった暖かみのある機関誌だと考えます。委員会メンバー全員で一生懸命頑張りますので、皆様、優しい気持ちで今期の機関誌をご覧ください（笑）。また今期原稿依頼をお願いするかと思いますが宜しくお願い申し上げます。

（記事：委員長 河津）

※この紙は再生紙を使用しています。　※環境に配慮した「大豆油インキ」を使用しています。 PRINTED WITH SOY INK